

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26370818

研究課題名（和文）20世紀初頭の中国における帝制と共和制の論理

研究課題名（英文）The Logics of Monarchy and Republic in Early Twentieth-Century China

## 研究代表者

吉澤 誠一郎（Yoshizawa, Seiichiro）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：80272615

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、20世紀初頭の中国政治史について理解を深めるために、皇帝と大総統の地位をめぐる政治的な含意、制度設計や文化的葛藤について考察してきた。具体的には、中華民国初年の大総統就任儀礼について分析し、その場で顕示される正統性のありかたについて考察を行った。それによって、袁世凱の中華民国政権が解決しがたい難問に直面してきたことを示した。さらには、中華民国初年に袁世凱政権の顧問をつとめたアメリカ人政治学者グッドナウの模索を通じて、当時の憲政をめぐる争点にせまることができた。

研究成果の概要（英文）：This research project focused on the status of emperors and presidents, especially the political connotations, institutional designs, and cultural frictions concerning them to gain new insights into political history of early twentieth-century China. For example, the inaugural ceremonies of presidents in early republican China were analyzed to understand how the political legitimacy was shown in the rituals. It was pointed out that Yuan Shikai had been forced to confront a very difficult puzzle when he managed to create political legitimacy of his own. Another attention of this research was directed to Professor Frank Goodnow, who was an adviser to Yuan Shikai, and made trials and errors in search of constitutional regime in China.

研究分野：中国近代史

キーワード：辛亥革命 君主制 共和制

## 1. 研究開始当初の背景

辛亥革命および中華民国の成立という事件は、その百年目の機会(2011-2012年)に改めて様々な議論がなされることになった。もちろん、この変革の重要性については疑問の余地はないが、昨今では、例えば立憲制の追求という点に注目して清朝最末期から民国前期にかけて連続した課題があったとみる意見も説得力を持っている(西村成雄「20世紀中国の政治変動と正統性問題」『新しい歴史学のために』278号、2011)。しかし、帝制から共和へという転換が政治的な表象にもたらした影響もまた見逃すことができない(Henrietta Harrison, *The Making of the Republican Citizen: Political Ceremonies and Symbols in China, 1911-1929*, Oxford: Oxford University Press, 2000)。

20世紀初頭の中国政治史の理解という点では、立憲制導入における行政機構の改変や中央と地方の政治関係の再編に着目した研究が成果を挙げてきた(曾田三郎『立憲国家中国への始動 明治憲政と近代中国』思文閣出版、2009; 金子肇『近代中国の中央と地方 民国前期の国家統合と行財政』汲古書院、2008)。これに対し、本研究は具体的な行政制度ではなく、政治的な統合の中心となるべき皇帝・大総統をめぐる政治的な論理と文化的位置づけを問い直すことが必要であると考えた。

研究代表者は、これまで帝制を支える政治文化の変遷およびその核心となる中国ナショナリズムの形成について研究を進めてきた(吉澤誠一郎『天津の近代 清末都市における政治文化と社会統合』(名古屋大学出版会、2002; 同『愛国主義の創成 ナショナリズムから近代中国をみる』岩波書店、2003)。しかし、これまで君主そのものをめぐる政治的な議論やそれと結びついた文化的背景についての考察は課題として意識するにとどまってきた。

しかし、たとえば清朝が権力を失ったあとも清朝への忠誠を示し続けた者が少なくなかったことを見ても(林志宏『民国乃敵国也

政治文化転型下の清遺民』聯経、2009)、20世紀初頭の君主をめぐる論理と心理は、「アジア最初の共和国の誕生」によって雲散霧消したわけではない。むしろ、たとえば清朝が存亡の危機にさらされたときに梁啓超が「虚君共和」つまり実権のない君主を戴く共和国を構想したように、君主の存在に何らかの意義を認めるといふ政治思想はありえた。また、士人や民衆のレベルでも、文化的正統性と結びついた君主像は必要とされていたのである。

加えて、国際的な文脈からの考察も欠かせない。「虚君共和」の具体例としてイギリスの国制を意識したとき、当時のイギリス王家がドイツ系ハノーヴァー朝の血統であったことは、満洲人王朝の正当化にも役立つ論理

であったかもしれない。さらに、清朝の立憲制導入過程では日本の明治憲法が大いに参照されており、日本の天皇を意識して(場合によっては対抗する形で)清朝皇帝をめぐる儀礼も再編されようとしていたと見られる。むしろ、中華民国が成立すると、共和国の大総統の儀礼は、また別途のモデルのもとで構想されたはずである。

こうして、袁世凱が皇帝即位をめざした動きとその挫折は、単に彼の政治的野心がもたらした波乱とみるべきではなく、以上のような君主・元首のありかたをめぐる言説や輿論と深い関係をもったものとして分析してこそ、その歴史的意味を十全に理解することができるという見通しを持つに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、「アジア最初の共和国」とも称される中華民国の成立について、皇帝と大総統の地位に着目して議論を深めることを意図した。そのために皇帝と大総統の地位をめぐる政治的な論理、制度設計や文化的葛藤について考察することをめざした。このことを通じて、辛亥革命から袁世凱政権に至る時期に起こった様々な現象、たとえば袁世凱が皇帝になるうとして失敗した経緯などについて、これまでとは異なる説明を与えることができるはずである。また、同時代の政治思想・憲法理論を当時の中国人がどのように理解し運用しようとしたのかについて考察することを通じて、今日簡単に使われている帝制や共和制という概念そのものについて再吟味することも目的とする。

20世紀初頭の中国における立憲制への志向は歴史の大きな流れといえるが、イギリスの事例から明白なように立憲制は君主制とは矛盾しないのであって、とくに君主制をめぐる議論に焦点を当てることに、本研究の独自の意義がある。このような視角から議論を進めることによって、これまでほとんど説明が与えられなかった袁世凱の帝制導入問題についても、理解していくことが可能になると期待される。

また、この研究は、国際比較の観点を重視する。いうまでもなく、明治以降の日本の立憲制においても、天皇の位置づけは大きな論点であった。このことは、憲法学をふくむ法制理論において日本から多くを導入していた清末民国初年の中国においても、君主や元首といった概念について、真摯な思考と中国の実態にあった適用が必要となったであろう。むしろ、「大総統」の概念についてはアメリカ合衆国大統領という制度の影響が大きかったと見るべきであろう。このような国際的な視野から、辛亥革命について再検討を試みることも、本研究の目的であった。

また、そもそも中国語の「共和」という概念についても、梁啓超の「虚君共和」の言い方に示されるように、必ずしも君主制を排除

しないかもしれない。日本語の「共和」概念も必ずしも英語の republic と同じではなく、この点について吟味するのも、本研究の目標である。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究課題では、具体的に次の諸論点に着目し、研究を進めていくこととした。

#### 辛亥革命における君主権と軍隊

清朝最末期における軍制改革は、欧米や日本に範を取った「新軍」と総称される軍隊を生み出した。しかし、結局は、武昌における新軍によって清朝は権力を失っていくことになる。新軍の蜂起は、指揮系統に忠実であるべき軍隊が、清朝を裏切ったということの意味している。辛亥革命の展開を当時の人々の発想に即して理解するために、「忠誠と反逆」に注目することは、非常に有効な接近法と思われる。とくに問題となるのは、清朝は彼らの忠誠心を確保するためにどのような措置をとりえたのかという点である。たとえば、軍紀を維持するための措置や、功績に対する報奨などの制度の整備について考えてみる必要がある。

他方で、清朝を打倒しようとして革命の宣伝を行う側の立場からは、自らの陣営に新軍將兵を引き寄せるべく、彼らの忠誠の対象を転換させることが課題となった。こうして、「忠誠と反逆」という観点から、君主権のもつ意味を考察していくことを、研究方法とした。

#### 民国初年の大総統の位置づけ

中華民国臨時大総統となったのが孫文と袁世凱であるが、その地位は、政体のなかで如何に位置づけられていたのか、その制度設計はもちろん、広い視点からの分析を進める。たとえば彼らは就任にあたり如何なる儀礼を執り行い国家指導者としての立場に基づく特殊権能を発揮したのであろうか。皇帝政治の久しく続いた後に民国が成立したとき、彼らが皇帝に代わる「大総統」という観念をどのように構築しようとしたのかという問題である。とくに、袁世凱は、南京の臨時参議院によって選出されただけでなく、清朝が権力を手放すにあたり指名されて権力の正統性を得たことから、その就任の過程を儀式の内実にも着目して詳細に分析することが必要であろう。

#### 袁世凱による帝制導入の試み

袁世凱が皇帝になろうとして挫折する過程は、これまで彼の権力欲によって簡単に説明されてきた。しかし、民国の大総統として権力の集中と安定をめざせば済むように思われるのに、なぜ敢えて(反対が予想される)皇帝就任をめざしたのかという疑問は解消されない。さらに、たとえば袁世凱の顧問を務めたアメリカ人の行政学者グッドナウも帝制が望ましいことを示唆するなど、帝制を支持する理論的な根拠も提示されており、ま

た首都や地方の士大夫・民衆のなかにも皇帝の存在を期待する心性があったとも思われる。この問題について理解を深めるならば、逆に皇帝制度から共和制度への移行にあたって、何が大きな困難であったのかを見通すことができる考えた。

(2) 史料調査としては、とくに米国で実施した。アメリカ合衆国国立公文書記録管理局(NARA)に赴き、国務省文書における中国関連の史料を閲覧した。加えて、ジョンズ・ホプキンス大学に所蔵されるグッドナウ文書(Goodnow Papers)を調査した。当時のグッドナウはアメリカの政治学界では有力な学者であり、袁世凱の皇帝即位を支持する発言をしたのも、一定の理論的背景があったとも言える。その点について、解明を進めることができた。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果は、次の三点にまとめられる。

(1) まず辛亥革命時期の軍隊の動向から、皇帝に対する忠誠の問題を考察した。軍隊は、本来、清朝に忠誠を誓うはずの存在であったが、実際には、辛亥革命は新軍の蜂起を大きな契機としていたことは周知の事実である。このような反逆は、どのような歴史的意味を持っていたのかについて考察した。

清末の対外危機のなかで袁世凱や張之洞などが軍制改革を主導していった。この時期には、軍人を名誉ある職業とする動きがあり、他方で、科挙の廃止によって軍隊に入ることが新たな立身の経路として提示されたという事情もあった。軍人には、国難に主体的に立ち向かい、犠牲をおそれず大義を果たすという精神が求められたが、しかし、このような価値観は、必ずしも君主への忠誠と一致するとは限らなかった。むしろ、体制転覆をはかる革命派は、そこを巧みに利用していったのである。革命発生ののち、多少の文武官は清朝に忠誠を尽くしたが、一部の高官は持ち場を離れて逃亡した。とはいえ、多数派は革命政権になびくことになった。それを裏切りと非難する意見は少なかったが、このように反逆を正当化することこそが、革命イデオロギーの重要な機能であったことを理解することができた。

(2) 大総統の就任式典に注目することによって、中華民国袁世凱政権の正統性の問題について考察した。この問題が複雑な様相を呈した理由の核心には、正統性の由来が二つ存在したことにあった。

ひとつは、孫文の臨時大総統就任によって中華民国の政権が成立したことに由来する。孫文の就任儀礼にみえる辞任誓約は、あからさまに言えば、その地位を袁世凱に譲る予定を示唆したものであった。その後、袁世凱は、孫文の推挙および南京の臨時参議院による

選挙を経て臨時大総統に就任した。

この経緯の背後に仕組まれていたのは、革命派による政権樹立の論理のなかに袁世凱を取り込もうとする企図にほかならない。こうしてみると、孫文の就任儀式における辞任規定こそが重大な政治的布石であったのであり、かりに孫文自身の内心に不満があったとしても、新政権の暫定的な首班という地位に甘んじなければならなかった。

袁世凱としても、南北対立を解消するためには、南方革命政権の正統性を自らのもてに獲得するのが現実的な方途であったが、南京からの推挙を受け入れてしまえば南京臨時政府の正統性の原理を否定することは難しくなる。

他方で、袁世凱は、全面的に南方革命政権の論理に服従するつもりはなかった。そもそも清朝の遜位詔書は、全権をもって臨時政府を組織することを袁世凱に託していたのであった。彼は、ひとまず北京の既存の政権を掌握したうえで、それを「中華民国臨時政府」と呼んだりした。袁世凱は、臨時大総統就任にあたって、南京の臨時参議院による選挙に加えて、蒙古王公や北方の軍人・紳士たちから推挙されたという形を整えようとした。ここには、南京の臨時参議院が代表しているのは必ずしも全国民ではないという含意があり、南方革命政権と異なる要素を添加することによって、単に南京から移譲されたというのに止まらない、新しい政治的正統性を構築しようとしたのである。しかし、清朝から政権を引き継いだという論理を、臨時大総統の就任儀礼に組み込むことはできなかった。このように、その二つの正統性原理は、本来的に対立する性質があり、両者を折衷することは非常に困難であった。

1913年、内乱(国民党の立場からは第二革命)を鎮圧した袁世凱は、いよいよ正式に大総統に就任した。その正統性は、国会議員の投票によって選出されたことによる。この就任式典には、南方革命政権と清朝とに由来する二つの正統性原理を踏まえつつ超克しようとする政治的意図をも読み取ることができる。しかし、袁世凱にとって、この二つの正統性原理に基づいて政権を安定させることは所詮は困難であり、そこにこそ彼が皇帝になって全く新たな正統性を創出せざるを得なかった大きな動機を見出すことができる。

(3) 中華民国初年に袁世凱政権の顧問をつとめたアメリカ人政治学者グッドナウの模索を通じて、当時の憲政をめぐる争点にせまることができた。グッドナウが顧問として置かれた状況および彼の中国理解についてなるべく丁寧に理解したうえで、彼の発言の意味を検討することをめざした。グッドナウ招聘の経緯については、これまでに利用されていない史料(アメリカ国務省の文書)も利用することができた。

また、グッドナウが中国の民主化の可能性

をいかに考えていたのかという点に留意して、彼の体制構想について一貫した論理を見出すことができた。そのなかで、なぜ帝制を示唆するような論説を書いたのかという古典的な問題についても、グッドナウの視点から十分な回答を出せたと考えている。

グッドナウは、袁世凱政権の顧問としての立場が実際には大した権能を発揮できないことに苛立ちを感じていた。にもかかわらず、中国における民主主義の可能性を如何に伸ばすかという問題意識から、提言の努力を続けたのである。

ここで留意すべきことは、グッドナウ自身の政治学者としての学問的傾向である。彼は、現実の民意機関および行政機関の果たす機能について考察する観点を確立したという点で、行政学の祖と見なされる人物である。彼自身はアメリカの民主主義を擁護しているとはいえ、代議制が如何にして民意を反映できるのかという問題の困難さをよく理解し、しかも行政の効率性と政治の民主性を両立させるための工夫についても考究を進めていた。彼は、アメリカの政治学が政治哲学の理念性から離れ、現実の政治を把握しようとする社会科学としての客観性を志向するようになっていくという転換を推進してきたのであった。あくまで現実を踏まえた立論をしようとするあまり、現実を引きずられていく傾向があったと言ってもよいだろう。それゆえ、中国が民主主義を実現するには多少の時間を有するという結論に至ったのだとも言える。

このようなグッドナウは、欧米の政治制度の優越性という発想を強く有していた。アメリカですでに経験していたように、政治学者として現実の政治に対して有意義な知的貢献をするというだけでなく、優れた政治制度をどのように中国に根付かせるのかという問いに対して、彼は回答を与えようとしていた。その結果として、中国の問題は中国の歴史と伝統を踏まえて解決されるべきだという主張を繰り返すことになったのである。

以上のように、グッドナウの問題意識に即して、袁世凱帝制問題について考察することができた。なお関連して、グッドナウのよく知られた論文「共和与君主論」の公表時期についても、考証によって通説とは異なる指摘を行った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

吉澤誠一郎「中華民国初期における大総統就任式典」、『東洋史研究』76 巻 1 号、2017 年刊行予定、査読無し、頁数未定

吉澤誠一郎「中華民国顧問グッドナウによる国制の模索」、斯波義信編『モリソンパンフレットの世界 II』東洋文庫、2016 年、査

読無し、105-129 頁

吉澤誠一郎「軍隊の動向からみた辛亥革命」、『早稲田大学高等研究所紀要』8号、2016年、査読無し、148-152 頁

吉澤誠一郎「二十一か条要求と日中関係の転換 100年目の回顧」、『歴史地理教育』834号、2015年、査読無し、62-67 頁

吉澤誠一郎「清末中国における男性性の構築と日本」、『中国 社会と文化』29号、2014年、査読無し、42-65 頁

〔学会発表〕(計 6 件)

吉澤誠一郎「辛亥革命にみる軍人の忠誠と反逆」、日本西洋史学会小シンポジウム「忠誠のゆくえ 近代移行期における軍事的エトスの比較史」、2017年5月21日、一橋大学(東京都国立市)

吉澤誠一郎「民国初年の対日ボイコットにおける東南アジア華僑と孫文」、孫文生誕150周年記念国際学術シンポジウム、2016年11月27日、神戸大学統合研究拠点(兵庫県神戸市)

吉澤誠一郎「武士道の近代命運：晚清中國の尚武理念與性別重構」、第5届「漢化・胡化・洋化」：傳統社會的挑戰與回應國際學術研討會、2016年11月5日、嘉義縣民雄鄉(台湾)

吉澤誠一郎「中華民國袁世凱政權による国家儀礼の模索」、東洋史研究会大会、2015年11月3日、京都大学(京都府京都市)

吉澤誠一郎「軍隊の動向からみた辛亥革命」、国際シンポジウム「革命と軍隊 明治維新・辛亥革命・フランス革命の比較からみえてくるもの」、2015年7月19日、早稲田大学(東京都新宿区)

Yoshizawa Seiichiro, "Political Ideals of *New Youth*: Chen Duxiu and Republicanism," The Association for Asian Studies, the Second AAS-in-Asia Conference, 2015年6月22日、台北市(台湾)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

吉澤 誠一郎 (Yoshizawa, Seiichiro)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：80272615